
限界はじまりました

tkkosa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

限界はじまりました

【Nコード】

N3771K

【作者名】

tkkosa

【あらすじ】

弱き者でありながら正反対の生き方をしている姉妹の物語。

一つのストーリーを前編は妹、後編は姉の両方の観点から書いてます。

前編（前書き）

○登場人物

細井恵里加・ほそいえりか（妹、生真面目に慎重に生きていくタイプ）

細井那美子・ほそいなみこ（姉、自分を強く見せるために繕うタイプ）

前編

どうして、世間はこうも弱い者に冷たいのだろうか。どうして、人間は弱い者を見て

見ぬフリをするのだろうか。答えは分からない。私はその「弱い者」の方にあたる人間だから。

今日、母が死んだ。自殺。姉が家に帰ったら、首を括って上から物みたいにくら下がってたらしい。母は物ではなく人間。何分後かに姉が電話したのは何故だか私。私には警察に直結するパイプなんかない。謎の裏機関にも精通していない。ただの高校生。今月から成り立てホヤホヤの新米女子高生。姉は冷静そうに事態を話そうとしてる。無駄。

語調がボロボロ。動揺バレバレ。いざという時に嘘を付けないタイプ。付けないなら付くな。焦る姿は痛々しい。事態を告げられ、私は呆然とする。「えっ」とだけ言った気がする。多分、実際言った。今日の日付を考える。違う。性悪な嘘だろうか。違う。嘘

は付けないタイプ。付きそうに見えるけど、心は弱い。弱いから強く見せようと飾りを

自分に付ける。でも、強くなっているはいない。だから、きっと真実。

母の死は真実。今、

部活終わりの帰宅途中に最寄り駅の駅ビルの本屋に寄り道してる私には何の实感もない

けれど真実。立ち読みしてたのは自己啓発本。結構、参考にしてる。

とにかく、本はそこまでにして家に帰ることにする。元々、買うつもりもない。家に置いてたら、何か迷いでもあるのかと疑われてしまう。そりゃ、人間なんだから迷いはある。駅から出ると、そこそのスピードで自転車を走らせる。街中の全速力はなんか格好悪い。駅南口発の大通りの信号を5つ通り過ぎたところで私はそこそこ止める。ここで頑張ったところで、おそらく現状は何も変わりはない。そこに気づいてしまうあたり、我ながらドライだと思う。こんな娘に育てたのは母なのだから、怒らないでもらいたい。

家の前には救急車とパトカーがいた。姉には110をするように言っておいたから。言う前に気づいてくれるとありがたい。自転車を降りて中に入ろうとすると、隣の家のおばさんが庭からこっちを見てる。一軒家だからどこの家族が緊急事態かは即に伝わる。

よく見ると、向かいの家の窓からおばさんがこっちを見てる。なんか気色悪い。見る

なら堂々と見ればいいのに。隠れるから卑しく映る。家に入ると、

「ただいま」って言

いそうになった。慣れって怖い。物音は聞こえるけど、人の姿が見えない。物音は二階

からしてる。二階で吊ったんだ。吊るところなんかあったっけ、と考える。今じゃない

だろ、と打ち消す。リビングに荷物を置いて、階段を上っていく。ドキドキしてくる。

結果は分かってる。なのに、緊張する。姉が取り乱すのも納得だ。

私の方が先に帰って

たら、私がああなあってたんだろう。寄り道してよかった。二階では、警察っぽい人と救

急隊っぽい人が母の体を囲んだ。っぽい、っていうかそうだ。ちようど、ロープから

首を外して床に体を降ろしたところ。吊ってるところを見なくて済んでホッとする。表

面には出さないけど。姉は少し離れたところで立ち尽くしている。

あんな阿呆顔、久し

ぶりに見る。救急隊が母を運んでいく。擦れ違いざまに母の顔が見えたが、無様な感じ

だった。ああはなりたくない。姉に声を掛ける。限らないローテーション。梅雨時の太

陽か今の姉か、ってぐらい。

「お父さんに電話したの」

「まだしてない」

「なんで」

「なんか、大事な会議とか昨日言ってたし」

バカだな、こいつ。二流会社の会議と母親の命を天秤にかけるな。それで会議が勝っ

たんだからつくづくな姉だ。冗談は格好だけにしてほしい。姉の格好は今どきのケバイ

ギャル。私はいたって普通。いつからか、姉だけ道を逸れてった。そこに関して、別に

興味はない。勝手にやってくれ、って感じ。私も勝手にするから。勝手にするような事

は特にない。第一発見者の姉は警察につかまる。逮捕じゃない。話を訊かれてる。その

間に、父に電話を入れておく。会議中じゃなかった。父は最初は話を受け入れなかった。

まあ、その反応もあるだろう。ただ、私は嘘を付くタイプじゃない。付けないわけじゃ

なく、付かない。15歳はしがらみも少ない分、純粋さはそれなりに残ってる。付きた

くなれば付くのかもしれないけど。最後は父も分かったようで、「今から帰る」と急ぎ

早に電話を切った。その後、私も警察に話を訊かれた。母の最近の様子について。変わ

りはなかった、とだけ答える。サインはなかったはず。あったら、止めてたはずだし。

警察と話していると、丁寧な言葉になる。年齢が上だからっていうのとは別に、不思議な

魔力がそこにはある。警察は魔法使いの溜まり場じゃない。

父が帰ってくると、3人で母の遺体を見に行く。父は悲しそうな表情をしていたが、

泣くまではしない。姉も私も泣かない。そういう空気ではなかった。こういう空気を

聞かれても答えられない。こんなの、そうそうあるもんじゃない。なんか、心臓を軽く

引っ張られる感じ。分かりにくいけど、これがベスト。感情に浸ったりするけど、これ

からどうするんだっていう現実的な思いもあって息が詰まる。その後に通夜もあったけ

ど、基本的に父との会話は義務的なものしかない。息は詰まるばかり。本気で詰まって

やろうか、と2回思った。今やったら、母の後追いって言われるのかな。それは勘弁。

そんなにこの家族に愛情は抱いてない。私の命を引き合いにして母を元に戻してほしい、なんて思わない。

「ねえ、この先どうなんのかな」

通夜の後、珍しく真剣な顔で部屋に入ってきた姉の言葉。どうなるものにも、流れに身を任せるしかない。自分の力で生きてくほど、私と姉は自立していいない。家や学校のあれこれは母頼み、お金は父頼み。私たちが自分だけの力で出来るなんて、何があるだろう。もしかして、何もないかもしれない。非力さの痛感。15年、私は何をしてきたんだろう。食うもん食って、出すもん出して、呼吸するだけとか。姉は適当に宥めたけど、お先は真っ暗。

次の日は葬式をして、母は骨になった。随分、あっさりとしたものだ。自分もいつかこうなるのかと思うと空しくなる。どうせ誰もが通る道なんだ、と諦めておく。妥協は便利な逃げ道。そうそう前に進めるほど人間は強くない。理想通りの人生なんてない。大体、妥協。

朝食は私が食パンを焼いてジャムを塗った。適当。サラダと目玉焼きを出すほど気は利かせない。あえて利かせない。恋人に作るんじゃない、張り切る必要はない。飲み物が欲しくなってコーンスープを足した。一応、人数分。昼食は3人でファミレス。骨になった母を目の当たりにした後でも、ご飯はきっちり食べられる。人間、そんなものだ。夕食はハンバーグを作る。なんだか無性に食べたくなって。ハンバーグは母の得

意料理。作ったことはあったから、レシピを見ながらなら時間も掛からない。気分いいからサラダもプラス。自分そこそいケンじゃないの、とか思ったり。錯覚。味、下の中。2人とも何も言わなかったけど、姉が一度しかめっ面をしたのは確認。文句あるならファッキンでも行ってこい。

お風呂は姉が入れた。風呂掃除も姉。音しか聞こえなかったけど、きつと大雑把炸裂させてるのは間違いない。掃除は父にしたけど、見た目そんな汚れてないから結局しなかった。洗濯はそれぞれ時間差。母以外に洗濯物見られるのは気が引ける。父になんか絶対嫌だし、姉にはもつと派手なのにしろとか言われそう。シンプルで何が悪い。私はいたって普通。

次の日からは通常の日常。母の事なんかあったのかどうかってくらい、今まで通りのスケジュール。母は確かにいない。朝食は白飯を炊いておにぎりを7個作った。父3、姉と私2。お新香付き。っていうか、何で私のご飯係みたいになっでんの。一番面倒なところ、自然に擦り付けられようとしてない。

学校に行くと、仲の良い友達が心配してくれた。大丈夫、悲しむ暇ないぐらい窮屈な時間が続いてる。高校に入って、友達が2人できた。上出来。顔は私が1番、背は2番、勉強は2番。これぐらいが妥当。良すぎると反感買いそうだし、悪すぎると劣等感に萎

えそうだし。

友達は増えるのと同時に減っていく。高校で新しく仲良くなる子がいれば、連絡が疎遠になる小学校と中学校の子もいる。あんなに遊んでたのに、今ではばったり。友達を作れるキャパシティって決まってるんだろうか。私なら数人。両手で数えられるだけ。

それ以上の親交は無理。それ以外の人がどうなったっていい。明日、性転換してようが構わない。ご自由に。

よく友達のためなら夜中でも飛んでいく、って聞く。残念ながら、私の辞書にはない文章。夜中は寝ます。考え方が乾いてるかもしれないけど、その友達もこつちをそんな深くは思っていない。多分、優先順位の5番手ぐらい。15年間でそれなら、人生終わる頃にはおそらくランク外。私がいなくなろうが、生きてくうえで支障はないはず。また新しい友達作ればいいんだし。

昼食は購買でパンとコーヒー牛乳。屋上で食べたいって言ったら、2人とも着いてきた。正直、来なくていい。ゆっくりしたかったから。なんで、学生時代の友達ってこうも馴れ合うんだろう。教室の移動も一緒、果てにはトイレまで一緒。絶対に出ないやつもいるはず。それが正解なんだろうか。不明。本気の関係なら、そこまで相手に干渉しない気もする。それが優しさじゃないの。

放課後、帰りがけにスーパーで買物。何度も来た事はあるけど、

いつもとは違う物を
買わないとならないから自由がきかない。いつもは飲み物しか買わ
ないけど、今日は食
べ物や日用品まで。っていうか、何で私が買物しなきゃなんないの。
うまいこと、押し
付けられてない。帰ったら、言ってやろう。

「あら、恵里加ちゃん」

「あつ、こんにちは」

隣の家のおばさん。あんまり長話に付き合わされたくないな。で
も、通夜に来てくれ
てるから蔑ろにできないし。

「お買物かしら。偉いわねえ」

「いえ、そんなことないです」

「ご飯、あなたが作るの」

「はい、一応」

偉いわねえ、とおばさんはいやに感心してる。でも、今のところ
私が作ったのって、
食パンとお湯入れるだけのコーンスープと下の中のハンバーグと物
乗っけるだけのサラ
ダとおにぎり。褒められたもんじゃない。恥ずかしいから言わない
けど。それより、こ
こを切り抜きたい。井戸端会議に足を踏み入れるほど、肌は痛んで
ない。愚痴ならある
けど。

「一昨日、通夜に来てもらってすいませんでした」

「いいのよ、そんなの。それよりも家の事は大丈夫なの」

これ、長くなりそう。適度な返答で撒いておく。今だけならまだ
しも、この先も続き
そうだし。パパッと買物して、顔見知りの大人に会わないように目
を見張らせながら帰

宅。学校の荷物と買物袋のダブル、きつい。

独りきりの自宅はとてつもなく静か。足音もない。テレビの音もない。洗濯機の音もない。掃除機の音もない。何もない。孤独。今までは家に帰ったら母がいたから気づかなかった。「おかえり」と言ってくれる人もいない。母は本当にいなくなってしまうたんだ。実感。

なんとなしに家の中を歩いてみる。誰もいない。誰かいたら泥棒。父の部屋、ベッドがぐしゃぐしゃ。私の部屋、雑誌がぐしゃぐしゃ。姉の部屋、全部ぐしゃぐしゃ。見ていて見苦しい。ああ、母はこれをいつも綺麗にしてくれてたんだ。片付けなさいとか言われてうるさかったけど、感謝しないといけなかったんだ。

息をつき、心を決め、私は掃除を始める。汚れを取り、掃除機をかけ、雑巾で拭く。目に見えて綺麗になる様はやりがいがある。ついでに、父と姉の部屋に放られてた洗濯物もやってあげる。父と姉に私の洗濯物をやられるより何倍もマシだから。父の洋服は年齢よりは若く繕ってる。父は45歳。まあ、見せる相手がいるんだから気も遣うだろう。それでも、娘からしたら良い物ではない。どっちかっていうと姉の洋服は年齢どうこうじゃなく、基本的な道から外れてる。何を目指してるのかさっぱり。他の人のやらないファッション。オンリーワン、ってやつ。決して、非難はして

ない。どっちかっていうと、格好いいと思う。私は一度も着ることなく死んでくけど。

だって、下着なんか小さくて多少お尻の割れ目見えてるし。サービスも過ぎると罪なんじゃないの。

姉が帰ってきたのは20時過ぎ。私は17時前。良い身分なこと。どうせ、マックで駄弁ったりしてたんでしょ。同じような化粧して、同じような喋り方して、同じような制服のアレンジしてる女子たちと。

「ああ、腹減った。夜ご飯は」

「あと15分ぐらいで出来るけど」

姉はリビングのソファに寝そべる。やる気ゼロ。完全に私が料理担当と決め込んでるし。仕方なく、キッチンで料理を続ける。リビングから、テレビの音と姉の笑い声が聞こえてくる。イラつく。

夕食は麻婆豆腐。素を買ったから、調理はだいぶ楽。とにかく白飯に合うものを作っ

とけば、腹が膨れて品数いらないだろう。味噌汁はわかめとネギ。

朝、おにぎりの時に

味噌汁が欲しいって姉に言われたから初挑戦。生意気言いやがって、ってムカついたの

が本音。結果、失敗。味が薄い。昨日のハンバーグの「やりすぎ注意」の教訓が見事に裏目。

「これ、味薄くねえ」

「初めて作ったんだからしょうがないでしょ」

文句あるなら自分で作れ。全部作れ。

「お姉ちゃん、今日私が掃除と洗濯やったんだけど」

「うん、ありがとう」

それだけかよ。ごめんねとか謝ったり、明日はやるからとか付け加えたり出来ないの。

理由は分かっているよ。ごめんねなんて思っていないし、明日もやらないから。

父が帰ってきたのは22時過ぎ。食器片付けて、お風呂に入って、やっと一息つけた

ところだったのに。すぐに父の分の夕食を用意する。味噌汁の薄さには、何も言っていない。

「すまん。家事やらせちゃって」

「ううん、いいよ」

そう言うしかなかった。朝早くに出かけて、夜遅くに帰ってくる父に家事まで分担でやってくれとは言えない。私たちが生活していくお金を稼いできてもらっているんだから、強くは当たれない。

姉は風呂掃除はやってくれた。キッチンで食器を洗っていたけど、また大雑把炸裂な

音が聞こえてくる。父には何もやらせず仕事に専念してほしいと伝えた。私は何かを諦める必要があった。

それから、私には怒涛の日々が始まる。カーンってゴングが鳴るわけでもなく、ただ始まる。

朝は6時前に起きて、朝食の支度。出来たら父を起こし、朝食を食べてもらってる間に昨日洗濯した洋服にアイロンをかける。父を仕事に送ったら姉を

起こし、2人で朝食

を食べる。姉は起きないし、寝起きも最悪。自動的にこっちの気分も悪くなる。食器を

片付け、学校に行く支度をする。大体、姉と一緒に家を出る。姉は食器を片付けないけ

ど、支度に時間がかかるから同じ時間になる。一緒に家はあるけど、駅までは自転車だ

から会話はなし。駅で別れると、学校までは1人になれる。満員電車だから気は落ち着

かない。高校に入学して1ヶ月、今のところ痴漢には遭ってない。知らない中年に触

れるなんて、真つ平ごめん。もし遭ったら、警察に突き出してやる。電車を降りてから学校までの徒歩10分はようやくの有意義。な

るべく、知ってる女

子には会いたくない。学校に着くと、友達2人が自然に集まる。昨日のテレビの話が主

になってしまうけど、今の私にはテレビを見る時間なんてあんまりない。2人が私に教

えてくれる感じだけど、どうしてもテンションの差は埋まらない。授業はきちんと受け

る。変に生真面目なところがあって、授業中に携帯いじったり、本読んだり、絵描いた

り、寝たりすることはしない。聞き落として取り残されるのが嫌、っていうのが本音。

小心者。昼休みには購買でパンと飲み物を買って、教室で食べる。屋上で食べたいけど、

風吹いたり、埃来たり、雨降ったり、不自由もあるから教室が無難。午後の授業が終わ

ったら、そのまま帰る。

学校から最寄り駅までの徒歩10分はようやくの有意義。帰りは

人通りも多くない。

電車を降りると、駅近くのスーパーで買物。買物には慣れてきたが、近所の顔見知りに

会わないように気を張るのは落ち着かない。もし会ったら、挨拶程度の会話をして早め

に逃げる。学校に行ってる間の8時間、私はあんたたちより余裕がないんだよ。学校鞆

と買物袋のダブルで自転車漕ぐコツは掴めてきた。普通の15歳はそんなコツがあることも知らない。

帰宅すると、静かな家がお出迎え。一応の「ただいま」。何に對して言ってるのか、

自分にも分からない。家族分の洗濯をして一軒家の掃除、洗濯物を干したら夕食の準備。

毎日おにぎりやらパンやら簡単なものばかり出してもいいけど、それは作る側にもやり

がいが無い。より気が滅入る。だから、時間かかっても新しいメニューを作ってみる。

作ってる間に姉が帰ってきて、2人で食べる。お風呂に入って久々に一息、出る頃には

父が帰ってきて夕食を出す。食器を片付け、風呂掃除。姉が外泊した日に代わりにやつ

たら、その日から私がやることになった。姉がやるより私がやる方がいから、あな

がち押し付けるのも気が引ける。家事が終わったら、部屋で学校の宿題。その合間に友

達とメールのやり取り。どうしてもメール不精になってしまうのは許してもらってる。

宿題が終わると、ベッドにノックダウン。24時過ぎ、就寝。

慣れない家事に奔走して疲労も溜まるし、自分の時間もなくて息

が詰まる。毎日が押し寄せてきて、心が圧迫されていく。

だんだん崩落していく何かを察知していた。でも、それを止めることが私には出来ない。

い。それだけの心のゆとりがない。流れてく毎日の中、自分のやる事をやるだけで精一杯。

危険信号、黄色の点滅中。限界はじまりました。

5月中旬、体も心も悲鳴をあげてきてる。体や心は喋らない。その前の上旬、世間ではゴールデンウィークの期間。何が輝いてるのか、私には分からない。姉は友達と遊び

ほうけ、父は出張で数日家を空ける。独りぼっち、完全に家は私任せ。友達も家族旅行で誘いも来ない。独りぼっち、私は青春期に何やってるんだろう。淋しくて最終日に泣いた。

中間試験まであと5日。高校での初めての試験。結果は出したい。ただ、自信は湧い

てこない。授業はちゃんと受けてるけど、それだけ。中学の時は万全の状態で試験勉強をしてたのに、今回は全然出来てない。その分、不安が大きくなって襲いかかってくる。

このままじゃ、きっと思うような点が取れない。その思いにやられそうになって、姉の

部屋に行く。珍しく机に向かって勉強している。

「お姉ちゃん、お願いがあるんだけど」

「うん、何」

「ちよっとさ、家事を分担したいんだけど」

姉は一回こっちを向いて、また机に向き直す。

「何で。今のままでいいじゃん」

「試験あるでしょ。勉強したいから」

「うん。でも、私も勉強したいし」

あんたの意見なんかいい。っていうか、この期に及んでやらない
気か。これまで全部

私に押し付けといて。

「私さあ、今回赤点とか取るとヤバいんだよね。そっちはまだ入
学したばっかだから

いいじゃん」

いいじゃん、って私の人生を何だと思ってるの。あんたの赤点の
方がどうでもいいし。

赤点取るとヤバい状況になってる事が問題なんだよ。

「私もちゃんと勉強して試験に臨みたいの。家事、半分こにしよ
うよ」

「悪い。私、今回ホントに点取ないとマズいの」

「そんなこと言わないでさあ。やってよ、お願い」

「大丈夫だって。あんたならうまくやれるから」

何だよ、その根拠のない言葉。そんなんで、逃げようとしてんの。

「お姉ちゃん、私に全部家事やらせてんじゃん。少しくらい手伝
ってくれてもいいん

じゃないの」

「あんたがやった方がいいでしょ、性格上。部活も入ってないん
でしょ」

それは部活探してる間にこんなことになったから。そっちこそ、
テニス部の幽霊部員

なんでしょ。っていうか、絶対やる気ないんだな。

「分かったよ。やればいいんでしょ、私が」

「うん。頑張ってよ」

「はいはい。その代わり、どうなってもしんないからね」

半ば、やけくそで言い捨てる。こんな分からずやの姉だったのか

と再認識。昔っから
そうだ。面倒くさいこと、全部私に押し付けて。こっちの身にもな
ってみろ。姉は私の
身にはなれない。

姉の部屋のドアを強めに閉めて、自分の部屋になだれ込む。ベッ
ドに体ごと預けると、
涙目になりながら唇を噛む。悔しいから涙は流さない。あんな姉に、
涙なんか使いたく
ない。ふと顔を上げると、机の上の家族写真が目に入る。放棄した
父、いない母、勝手
な姉。こんな家にいたらダメになる。思いやりのない家庭のせいで、
全て重圧は自分に
掛かってくる。いつか、押し潰される。

中間試験の本番。調子が全く上がらない。上がらないことで、気
分は下がっていく。
悪循環。友達は順調らしい。放課後、2人で勉強してるみたいだし。
私には声も掛かっ
てないけど。こっちの立場を配慮してるんだろうけど、だんだん2
人との間に溝が出来
てきてる気もする。そのうち、越えられなくなりそう。

試験終了。手応えなし。そこそこはやれてるんだろうけど、納得
いくようなものじゃ
ない。しっかり準備してれば、もっとやれたはず。悪いのは周り。

私は被害者。たった
1人の被害者。この先もこれが続いてくのかと思うと、なんか憔悴。
姉は私の家事に何も言ってこない。もはや、それが当たり前と思
ってる。私は姉の母
親じゃないし、使用人でもない。父はたまに手伝いを願い出てくれ
るけど、それは柔に

断ってる。ここまできて変に氣遣いされたくないし、ちょっと手伝ったぐらいで家事を分担したような感覚を持たれたらたまらない。友達をよく労わりの言葉を言ってくれる

けど、快くないものもある。「花嫁修業になるじゃん」って言われた時はカチンときた。

花嫁になる気なんかないし、修行なんて気もない。そんな体のいいもんじゃない。拷問

に近い。隣の家のおばさんと向かいの家のおばさんは顔を合わせる

と声を掛けてくる。料理のレシピ、教えてあげようかって。いらない。今はネット社会、いくらでもレシピ

は手に入る。氣を遣ってくれるんなら放っておいてほしい。

「どうかしたの」

姉に声を掛けられて現実に戻る。私は元々現実にいる。夕食の準備中、私は包丁を空

に浮かせたまま止まっていた。それを不思議に思った姉の一言。

「別に」

「ふうん」

姉は冷蔵庫からオレンジジュースを出し、ガブ飲みして去っていく。本当は包丁を手

にしたまま考え事をしてた。これで自分を刺したら何かが変わるだろうか、って。皆が

私を心配してくれて現状を打破できるんじゃないか、って。いけない考え方だと思うけど、それぐらい追い詰められてる。

その時、ハッとなった。母が死んだ理由って、これなんだろうか。今まで深く考える

余裕がなかったけど、今ならなんとなく分かる。追い込まれてたんだね、お母さん。私

たち、知らない間にお母さんのこと追い込んでたんだね。ごめんね、気づいてあげられなくて。知らないのも罪なんだよね。

私……お母さんに謝りに行こうかな。

中間試験の結果発表。次々と返ってくる答案、次々と降ってくる憂鬱。全教科平均が

71点、学年平均が68点。学年順位が235人中の117位。愕然。中学3年の時の

学年末試験を思い起こす。全教科平均が88点、学年平均が73点。学年順位が252

人中の37位。差は歴然。この3ヶ月の間で私の成績はガタ落ち。まるで、私自身の人

間性が評価されたみたいだった。

友達2人が集まってくる。点数いくつだった、っていう興味本位の集会。友達は27

位と66位。2番だった成績はダントツのビリに降格。こんなはずじゃないのに。私、

こんなもんじゃないのに。

「恵里加はしょうがないよ。家の事やってるんだし」

「そうだよ。また次に頑張ればいいし」

友達が慰めの言葉を掛けてくる。憐れみみたいでムカつく。しょうがなくなんかない。

この点数を見た人はこれで私の価値を決める。次に頑張れやしない、これから状況は

変わらないんだから。私、もう無理。

「ちよつと黙っててよ」

机を全力で叩いて、大声を張り上げる。息が荒ぐ。顔を上げると、友達は動きが停止

したまま目が点、クラスメイト全員からの視線。そんな関係ない。

私の視線は友達を

睨みつけ、涙が零れてく。限界の来訪。鞆と答案用紙を掴み、教室を飛び出す。

目を赤くさせたまま、電車に乗り、自転車に乗り、家まで急速で走り続ける。早く楽

になりたい。こんな窮屈な環境から抜け出したい。自由になりたい。その一心で家まで

駆け抜けた。帰宅すると、キッチンへ一直線。キッチンまでは一回曲がる。包丁を手に

して、自分の部屋へ入る。ベッドに座り、姉にだけメールを送る。

泣きながら静かに包

丁を自分へ向けた。

後編（前書き）

○登場人物

細井恵里加・ほそいえりか（妹、生真面目に慎重に生きていくタイプ）

細井那美子・ほそいなみこ（姉、自分を強く見せるために繕うタイプ）

後編

どうして、世間はこうも弱い者に冷たいんだろうか。どうして、人間は弱い者を見て見ぬフリをするんだろうか。答えは分からない。私はその「弱い者」の方にあたる人間だから。

今日、母さんが死んだ。自殺。友達の用事が重なって、珍しく早めに家に帰ったら、首を括って上から物みたいにぶら下がってた。マジでビビった。嘘だろって思いたかったけど、現実があまりにもリアルに目の前にあったから無理。思考が止まっちゃって、何も考えられない。取り合えず、自分の部屋に荷物置いてベッドに座る。これ、どういうことだ。正解の分かっている問題を自分に投げ掛ける。わざと間違えたい。でも、正解は分かっている。何分か、呆然と訳の分かんない自問自答を繰り返す。そうだ、父さんと妹に伝えないと。先に妹に電話を掛ける。妹は高校生になったばかり。私は高校3年。焦らないように冷静に事態を告げていく。「えっ」と妹も呆然としてた。そりゃそうなるだろう。悪い冗談なんかじゃない。嘘は付けないタイプだし。付きそうだけど、心の中は案外弱い。弱いから強く見せようと飾りを自分に付けてる。でも、強くなっている

ない。妹から110を指摘される。あつ、そうだ。そっちが先じゃん。いや、もう死んでるからどっちが優先ってことはないか。でも、一応そっちが先なのが普通か。電話を切る。

妹は最寄り駅の駅ビルにいるらしく、今から帰ってくるらしい。

110に通信。初めての経験。まさか、こんな内容で体験することになるなんて思ってたかったけど。経緯を説明すると、いくつか質問されて、今から警察が来るって言われた。電話を切ると、ベッドに倒れ込んで息をつく。部屋の向こうには今も母さんがぶら下がってる。ものすごく変。極限に変。

10分ぐらいで救急車とパトカーが来た。玄関を開けると、見ず知らずの大人が数人入ってくる。場所を言うと、2階へ全員で移動。警察の人は母さんを見て驚きはしたけど、そこまですて印象じゃない。見慣れてるんだろう。死体を見慣れるってなんか嫌な感じ。人間臭さが衰えてそう。警察と救急隊が母さんの体をロープから外して降ろしていく。さすがに、我が母ながら死体には近寄りがたい。救急隊が母さんを運んでいく。それを見てるうちに妹が帰って来てて声掛けられたけど、今はあんな話とかしたくない気分。

その後、第一発見者なんで警察につかまる。逮捕じゃない。話を訊かれてる。帰ってきた時の詳細や母さんの最近の様子について。変わりはない。話を

と答える。いたって普通だったはず。その間に、妹は父さんに連絡を入れる。今日は大事な会議があるって言ってたから電話は控えてた。会議中に母さんが死んだなんて知ったらどうなるだろう、って思うし。警察と話すのは緊張した。道で擦れ違うだけでも背筋が伸びるし。

父さんが帰ってくると、3人で母さんの遺体を見に行く。父さんは悲しそうな表情をしてたけど、平生は保ってる。妹も私も泣かない。そういう空気ではなかった。どういう空気を聞かれても答えられない。こんなの、そうそうあるものじゃない。いろんな感情が交わってるけど、これからどうするんだっていう現実的な思いにも息が詰まる。その後に通夜もあったけど、なんか湿った雰囲気。通夜だから、それでいいんだろうけど。どンドン気分が落ちていく。基本的に父さんとの会話は義務的なものしかない。息は詰まるばかり。

「ねえ、この先どうなんのかな」

通夜の後、妹の部屋に行って訊いた。そんなこと聞いたところで結論なんて出やしないけど。自分の力で生きてくほど、私と妹は自立していない。家や学校のあれこれは母さん頼み、お金は父さん頼み。私たちが自分だけの力で出来るなんて、何があるだろう。もしかして、何もないかもしれない。非力さの痛感。18年、私は何をしてきたんだろう。お先、真っ暗。

次の日は葬式をして、母さんは骨になった。意外にあっさり。つてか、暇。何もしなくていいけどそこにいないといけない時間が多くて退屈。こういうの苦手。始業式やら終業式なんか特に。どうやったらサボれんのか、いつも考えるし。結局サボらないのが初心者なだけ。

朝食は妹が食パンを焼いてジャムを塗った。適当だろ。サラダと目玉焼きを出すだけの気は利かないのかよ。一応、後からコーンスープは出てきたけど。昼食は3人でファミレス。骨になった母さんの画はちらつくけど、お構いなしにご飯は食べられる。それはそれ、これはこれ。夕食は妹がハンバーグを作った。私もなんだか無性に食べたくなってたからありがたい。ハンバーグは母さんの得意料理。ただ、完成品はそれと比べられるもんじゃない。味、下の中。その場では何も言わなかったけど。お風呂は私が入れる。風呂掃除も私。まあ、なんとなくやってみただけけど。第一、風呂なんだから毎日掃除されてるようなもんじゃん。だから、大体でいいでしょ。掃除は父さんにしたけど、見た目そんな汚れてないから結局しなかった。同意。洗濯はそれぞれ時間差。かったるい。母さん、こんなの毎日やってたんだな。

次の日から通常の日常。母さんの事なんかあったのかどうかってくらい、今まで通

りのスケジュール。母さんは確かにいない。朝食は妹が白飯を炊いておにぎりを作った。なんか料理面倒くさいなって思ってたから、やってくれて助かる。質はまあ褒めたもんじゃないけど。

学校に行くと、仲の良い友達が心配してくれた。大丈夫なんとかやってるから、って笑顔を振り撒く。自殺ってのは伝わってないみたいだから病氣ってことにしとく。そうすりゃ、難しい事は分からないからって深い話まで潜り込まずに逃げれるし。自殺した家族、ってイメージ悪いでしょ。友達に陰でコソコソ叩かれんの嫌だから、これでいい。高校には友達が3人いる。いつも側にいるし、気持ちも通ってるはず。化粧も髪型も制服もそれぞれオリジナルで勝負。私の服装は今どきのギャル。前からそっち路線に踏み込んでたけど、今の友達というようになってから本格的に浸かった。顔は私が2番、背は2番、勉強は4番。これが妥当。ちなみに、4人ともバカ。バカ集団の中で1番バカやっとならば、周りは楽観的な印象を持つといってくれる。それが狙い。うまく溶け込んでくのが仲間内では重要。よく友達のためなら夜中でも飛んでいく、って聞く。そんなの楽勝。私を必要としてくれるんなら、どこまでも行く。それが仲間ってもんでしょ。誰かが凹んでる時には他の誰かが元気あげる。与えて、与えられる関係。これ最高。昼食は購買でパンとコーヒー牛乳。もっぱら、食べるのは屋上。

風が気持ちいいから。

そこで皆で駄弁るのがまた気持ちいいし。何でも話し合って、何でも助け合って、何でも分かち合える。どこに行くのも一緒、何をするのも一緒。自分を犠牲にしてでも仲間のために動く。それが優しさでしょ。

放課後も友達とマックで集会。基本、ファーストフード店で駄弁る。その日の気分で店選びすんのからスタート。ワンドリンクで数時間居座るのも慣れたもの。気遣う理由いらぬし。客だから。複数でいれば、店員の目も恐くない。元々の目つきが恐い店員ならいる。

友達と別れた後、帰りがけにスーパーで買物。といっても、買うのはコーラのペットボトル。ちゃんとした食材や日用品の買物なら妹がやってくれてるはずだから、私はこれだけ。

「あら、那美子ちゃん」

「あつ、こんにちは」

向かいの家のおばさん。妹から聞いたけど、一昨日の時に窓からウチの方を覗いてたらしい。気色悪い。あんまり長話に付き合わされたくないな。でも、通夜に来てくれるから蔑ろにできないし。

「お買物かしら」

「いえ、飲み物を買いに」

「へえ、ご飯とかはどうしてるの」

「ご飯は妹が作ってます」

「那美子ちゃんも何かやってるの」

「まあ、一応」

偉いわねえ、とおばさんはいやに感心してる。でも、今のところ私がやったのは風呂

だけ。褒められたもんじゃない。恥ずかしいから言わないけど。適度な返答で撒いて、パパッと買物。

帰宅したのは20時過ぎ。自分でいうものなんだけど、良い身分。仕方ないんだよ。

高校生だったって、やる事はたくさんあるんだから。今しか出来ない青春を謳歌しなきゃなんないのさ。

「ああ、腹減った。夜ご飯は」

「あと15分ぐらいで出来るけど」

じゃあ、出来上がりまで待とう。リビングのソファに寝そべる。

自分でいうのもなん

だけど、やる気ゼロ。完全に妹に料理担当を任せてるし。まあ、これも仕方ない。姉はいろいろと疲れてるんだよ。そう納得して、テレビを見る。

夕食は麻婆豆腐。味噌汁はわかめとネギ。朝、おにぎりの時に味噌汁が欲しいって言

っておいたから作ってくれたようだ。でも、味が薄い。昨日のハンバーグの失敗が教訓になっ

てないんだろうか。

「これ、味薄くねえ」

「初めて作ったんだからしょうがないでしょ」
なんだよ。一丁前に反論しやがって。作ってもらってる身だから、多少は許してやっ

「お姉ちゃん、今日私が掃除と洗濯やったんだけど」

「うん、ありがとう」

やってくれたんだ、ラッキー。正直、やるのかったるいなあって思ってたから。料理

は逃げれたけど、掃除や洗濯は私がやらされるか各自分担になるかなって考えてたら、

そこまで妹がやってくれるとはね。まったく、出来た妹で助かるよ。まあ、嫌々でやつ

てるんだろうけど。ごめんよ、出来の悪い姉で。

父さんが帰ってきたのは22時過ぎ。妹は父さんにも家事を強制する気はないらしい。

朝早くに出かけて、夜遅くに帰ってくるのに家事まで分担でやってくれとは言えないっ

てことで。私たちが生活していくお金を稼いできてもらってるんだから、父さんには仕

事に専念してもらう方がいいし。

お風呂は今日も私が入れる。風呂掃除も私。まあ、昨日に同じくなんとなくてやって

みたけど。それですら、ちょっと辛いかも。手抜きでやっちゃおう。バレないし、大体

でいいでしょ。

だんだん、私には通常の日々が戻ってくる。簡単に言っちゃえば、家族が1人減って、

母さんのやる事が妹に移っただけ。朝に私を起こすのは妹。基本、アラームじゃ起きれ

ない。寝起きも最悪。朝食は妹と食べる。父さんは既に家を出てる。会話はほぼ無い。

私は頭が起きてないし、妹は時間との勝負してるし。家出るのも妹と一緒に。妹は食器

の片付けしてるけど、私はなにかと支度に時間がかかるから同じ時間になる。一緒に家
は出るけど、駅までは自転車だから会話はなし。駅で別れると、学
校までは1人タイム。
ただ、満員電車だから気は落ち着かない。高校に入学して2年ちょ
い、今のところ痴漢
経験は5回。知らない中年に触られるなんて真っ平ごめんだけど、
警察に突き出すだけ
の勇氣はない。

電車を降りてから学校までの徒歩10分はなんかソワソワ。なる
べく、知ってる女子
を早く見つけたい。私みたいなギャルが道を普通に歩いてるのって
違和感。それに、根
が小心者だから体裁はすぐ気になる。ギャルってさ、もっとワー
キヤー騒がしいもん
でしょ。1人でポツン、って変じゃん。だから、なるべく側に誰か
いてほしい。結構、
淋しがり。

学校に着くと、友達3人が自然に集まる。昨日のテレビの話が主
になってくるから、
テレビを見る時間は何気に情報収集。今の流行りは見過ごさず、誰
が最先端を仲間へと
発信していくかの見えない勝負。授業は受けてるだけ。生真面目な
性格ではあるけど、
授業中は携帯いじったり、本読んだり、絵描いたり、寝たり。だっ
て、真面目なギャル
ってイメージダウンだから。だから、周りに合わせてお気楽に過ご
すし、バカでナンボ。
聞き落として取り残されてくのは嫌、ってというのが本音ではあるけ
ど。午後の授業が終

わったら、友達と街に繰り出す。数日も経てば忘れてるような話で盛り上がって、時間を過ごす。それが幸せ。

帰りがけに電車を降りると、駅ビルに寄り道。雑誌の立ち読みしたり、友達との話に出たアイテムを探したり、情報収集に余念なし。ただ、近所の顔見知りに会わないように気を張るのはどうにも落ち着かない。もし会ったら、挨拶程度の会話をして早めに逃げる。大抵、家事は出来てるかって話だから。妹に全部やらせてます、なんて言えっこないし。

帰宅すると、妹がいて父さんがいないのが常。妹は毎日家事を怠らず、学校が終わるとそのまま家に帰ってくる。家族分の洗濯をして一軒家の掃除、洗濯物を干したら夕食の準備。食事はほとんど初心者にしては上出来。毎回、メニューも変えてくるし。申し訳ないけど、私にはできない類。食事は2人で食べる。会話は付けるテレビの内容が大体。妹は流行に疎いから、私が情報提供してあげる。その情報を役に立たせてるのを見たことはない。食べ終わったら、お風呂で一息。風呂掃除はいつの間にか妹の仕事になってる。私が外泊した日に代わりにやってくれて、その日から妹がやることになってる。悪い気はするけど、私がやるより妹がやる方がいいから、あながち元に戻るのも気が引ける。それが終わったら、部屋でメールタイム。友達と電話すりゃいいじゃんっ

てぐらしいの交線。宿題はやらない。明日、やってきてる子に見せてもらえばいい。24
時過ぎ、就寝。

ゴールデンウィーク中、友達と遊びほうける毎日。別に毎日会うほどの予定はないし、結果同じことをしてるだけだけどそれでいい。一緒にそこにいるだけで。それが私の中の正解。

妹は家に缶詰め。出掛けるのは駅近くに食材や日用品の買物に行く時ぐらい。友達か家族旅行で誘いも来ないし、家事もやんなきゃなんないから遠出もしない。一日くらい、どっか気晴らしに連れてってあげた方がいいんだろうな。だけど、それは私の正解じゃない。まあ家族なんだし、そんなのしなくても心通じ合ってるでしょ。

父さんは出張で数日家を空けてる。絶対、嘘。今、父さんが何してるか私には分かる。だって、私知ってるし。あんたが浮気してんの。2ヶ月前ぐらいに私が帰りが遅くなつた時、家に着いたら父さんがベランダで電話してたの。気にせずに入ろうとしたんだけど、明らかに会話の内容がおかしい。好きだの、愛してるだの、お前だけだの、気持ち悪い文章ばっか。その文章が気持ち悪いんじゃない、それを言ってる父さんが気持ち悪いだけ。向こうは私に気づいてなかったからそのまま盗み聞きしてたら、どうしようにも浮気なのが確実。完璧に血の気が引いた。浮気、発覚、喧嘩、

離婚、転校、貧乏、とかいろんな単語がぐるぐる頭ん中を回ってパニック。父さんが電話切って家に入ってから玄関の前でパニック続行。これって、もしかして超ヤバいんじゃないねえの。私は誰にも言えずにそれを抱え込む。私じゃ解決しようのない問題なのに。そんで、その次の月に母さんが自分で死んだ。私は父さんの浮気が理由なんだと思った。信じてる人から裏切られて、そのショックで母さんは決めたに違いない。私や妹を残してくんだから、それなりの理由がないとおかしいし。正直、悔しい。父さんが憎い。浮気相手はもっと憎い。なのに、私は何も言えずに普通に父さんと暮らしてる。問い質して、家族が離れ離れになるのが怖いから。私が黙ってさえおけば、それで丸く収まる事だから。

中間試験まであと5日。高校3年の最初の試験、結果を出したい。先生から、今回もし赤点でも取ろうもんなら進路の保障はないって言われたから。別に大学なんか行かなくてでもいいんだけど、就職は出来そうにないし、専門学校に行くほどの夢もない。ここは1回、本気出しておく必要があるそう。ただ、自信は湧いてこない。授業は全然聞いてないし、今までの借金を背負ってるし。中学の時から試験勉強なんて仲間内で山張るぐらいで、実際全然出来てない。その分、不安が大きくなって襲いかかってくる。この

ままじゃ、きつと思うような点が取れない。その思いにやられそうになるのを払拭する

ために、珍しく机に向かって勉強に励む。あんまり頭に入ってこないけど、取り合えず

それが不安を落ち着けてくれるものと信じるしかない。そうしてるうち、妹が部屋に入ってくる。

「お姉ちゃん、お願いがあるんだけど」

「うん、何」

「ちよつとさ、家事を分担したいんだけど」

一回妹の方を向いて、また机に向き直す。何それ。無理に決まってるじゃん。

「何で。今のままでいいじゃん」

「試験あるでしょ。勉強したいから」

「うん。でも、私も勉強したいし」

適当にあしらおう。妹は勉強できるタイプ。私が気遣うことはない。

「私さあ、今回赤点とか取るとヤバいんだよね。そっちはまだ入学したばっかだからいいじゃん」

こっちは進路が関わってるんだから。優先順位で譲りなさい。

「私もちゃんと勉強して試験に臨みたいの。家事、半分こにしようよ」

「悪い。私、今回ホントに点取ないとマズいの」

「そんなこと言わないでさあ。やってよ、お願い」

「大丈夫だって。あんたならうまくやれるから」

なんだかんだ、家事もうまくやってるじゃん。あんた、器用にこなせるタイプなんだって。

「お姉ちゃん、私に全部家事やらせてんじゃん。少しくらい手伝

ってくれてもいいんじゃないの」

「あんたがやった方がいいでしょ、性格上。部活も入ってないんですよ」

テニス部の幽霊部員の私の言うセリフじゃないけど。でも、この際、言えるもん言っ
とけ。

「分かったよ。やればいいんでしょ、私が」

「うん。頑張ってよ」

「はいはい。その代わり、どうなってもしんないからね」

半ば、やけくそに言い捨てられる。部屋のドアを強めに閉められて、少しイラつく。

一応、悪いのはこっちだから何も言わない。甘えすぎてるとは思う。姉なのに、重荷を

全部妹に押し付けてるのも分かってる。もっと気遣えばいいのに、何でもやってくれる

妹をいいように扱ってる。それでも、私は自分を選んでる。私は戦わないといけない。

学校ではいろんなものと戦う必要がある。ふと顔を上げると、机の上の家族写真が目

に入る。放棄した父、いない母、出来る妹。そうだよ、恵里加。私にはあんたしか本気で

頼れる人がいないんだよ。だから、こんなに甘えてるんだよ。口では言えないけどさ、

感謝してるよ。分らずやの姉でごめんね、と心の中で言う。

中間試験の本番。調子が全く上がらない。上がらないことで、気分は下がっていく。

悪循環。友達も同調。放課後に4人で勉強してきたけど、類は友を呼ぶっていうんだろ

うか。同じレベルの人間が集まっても、そのレベルは抜けられない。そんなこと、口が腐っても言わないけど。

試験終了。手応えなし。そこそこはやれてるんだろうけど、納得いくようなものじゃない。しっかり準備しても、この始末。やっぱり、これまで蓄積してきた借金はそんな簡単に跳ね返せるものじゃない。この先もこれが卒業まで続いてくのかと思うと、なんだか憔悴。

妹は家事をしない私に何も言ってこない。もはや、それが当たり前と思ってる。この前のやり取りでもう諦めたんだろう。私はただただそのぬるま湯に浸かる。家に帰ってからはくつろぎたい。外で疲れてきた分、家ではそれを取り戻す。父さんはたまに妹に手伝いを願い出てるけど、それは柔に断ってるみたい。私としても、そんなに父さんに良い父親ぶってもらいたくないからその方がいい。特に、何も知らない妹には優しくしてやらないでほしい。優しくするだけ、あんたは妹を傷つけてるのと同じなんだから。心配しないでも、妹は私が守る。

「どうかしたの」
夕食の準備中、妹が包丁を空に浮かせたまま止まっていた。それを不思議に思った私の一言。

「別に」
「ふうん」

納得して、冷蔵庫からオレンジジュースを出し、ガブ飲みして去

っていく。何か考え
事でもしてたのかなと思ったけど。

中間試験の結果発表。次々と返ってくる答案、次々と降ってくる憂鬱。全教科平均が38点、学年平均が66点。学年順位が229人中の214位。赤点なし。久しぶりに心からホッとできた。

友達3人が集まってくる。点数いくつだった、っていう興味本位の集会。194位と203位と220位、友達の順位。ビリだった成績は3位に昇格。頭よくなったじゃん、って地位の低い褒められ方に笑顔。

授業が終わると、いつものように友達と群れる。今日はロツテリア。どこに行ったにしても、ワンドリンクに変わりはないけれど。多少迷惑ぐらいの盛り上がり方は常識。

私たちはありきたりなギャル像を崩すことなくやってる。これを今日も3時間ばかりは続けてく……はずだった。

話し出して15分くらいで携帯が鳴る。確認。メールの受信。妹からだ。開封。私は固まった。

『ごめんね。今から死ぬ』

何言ってるのか、全く分かんない。意味は分かってるけど、頭が理解してくんない。どうせ、ただの冗談でしょ。妹は嘘を付かないタイプ。生真面目な性格。だから、多分

真実。これは真実。妹は私に謝って、これから死のうとしてる。

「那美子、どうしたの」

友達が私の様子を察知して声を掛けてる。そんな声、聞こえてるだけ。耳に入ってるだけ。私の頭ん中、それどころじゃない。そうだ。何してんの。行かなきゃ。今すぐ、止めに行かなきゃ。

「帰る」

立ち上がり、それだけ呟いて飛び出す。那美子、って言われた気がする。そんなもん関係ない。何言われたって関係ない。

『今すぐ帰るから、お願いだから待ってて』

心の声をそのまま文章にして送信。絵文字のないメールなんて初めて。頭は白いまま、とにかく走って、電車に乗り、自転車に乗り、家まで急速で走り続ける。なんで、こうなるまで気づかなかったんだろう。そんな追い込まれてるなんて知らなかった。ごめん、謝る。何度だって謝るから。その一心で家まで駆け抜けた。帰宅すると、妹の部屋まで駆け上る。ドアを手に掛け、開くと妹が包丁を自分に向けたままベッドに座ってる。衝撃。

「何やってんだ、お前」

「来ないで」

怒鳴りつけると、それ以上の大声で怒鳴られる。あまりの場面と豹変した妹の姿に萎縮してしまう。

「もう決めたんだから。止めないでよ」

妹は両目を真っ赤にして、それでも泣き続けてる。睨むような瞳をして、息遣いも荒くなっている。

「バカなことすんなよ。こんなことして何になんだよ」

「私、楽になりたいの。もう疲れたんだよ」

「止めろよ。死んだってどうにもなんないだろ」

「いいでしょ、私がどうなろうと。どうせ、私がいなくたって構わないでしょ」

「そんなことない。恵里加がいないと困るんだよ」

「そんなの、家事がどうかでしょ。私はお姉ちゃんの親じゃない」

違う。そんなんじゃない。そんなじゃなくて、私にはあんたが必要なんだよ。

「そこで見といてよ」

妹は包丁を首元に持っていく。息遣いの感覚が不定になって、目が開いてく。ダメ。

もう、これ以上に大事な人を失いたくない。

「止めてってば。お願いだからあ……」

涙。涙。気づいたら、涙が止まなくなって膝から崩れてった。

「あんたしかいないんだってば……あんたがいなくなったら、私独りぼっち

になっちゃうんだよ……だから、頼むから死なないでよお」

あんたがいないと、私が私でいられる場所がなくなっちゃう。これから、どこにも落

ち着ける場所がなくなっちゃう。縋る一心で本心を投げた。母さんが死んだ時でも流れ

なかった涙がいくらでも流れてった。もう、妹の姿も見えてない。顔を伏せたまま、泣

きまくる。

そのうち、左肩に手の感触が伝わる。顔を上げると、妹の顔がすぐ側にあった。

「一つ、お願いしてもいい」

「何だよ」

「私の言うこと、何でも聞いてくれる」

「聞くよ、そんなもん」

「もっと家事やって、もっと化粧薄くして、もっと言葉遣い改めて、もっと早く帰ってきて、もっと優しくして、もっとちゃんとして、もっと姉らしくいて」

一気に捲くし立てられる。何言ってるのか分かんないけど、取り合えず「分かった」
って言うておく。

「最後にもう一つ」

「何だよ」

「お姉ちゃんにとって、私って何」

「はあっ」

「いいから、答えて」

私にとっての恵里加って………そんなの、あれだよ。

「一番大切な存在」

「………その言葉を待ってた」

妹は手にあった包丁を捨て、表情を崩して笑った。その手で頭を撫でられて、不器用

に私も笑った。2人で思いっきり抱き合って、全てのわだかまりは解けた。

泣き腫らした顔のままで「さっ、やろう」と妹は洗濯を始め、早速私は夕食の買物を頼まれてしまった。

翌日には、昨日の事は嘘みたいに妹はケロッとしている。妹は嘘

は付かないタイプ。

私は嘘は付けないタイプ。ただ、昨日と変わったのは妹は楽しそうに家事をしている。

もちろん、私はいっぱいいっぱい。

「お姉ちゃん、料理ホントに下手くそ」

「うっせえな」

「ほら、言葉遣い直してって言ったでしょ」

「そんなもん、そう簡単に直らねえつつうの」

せめてもの抵抗で言ってやったら、失敗して形が崩れた方のオムレツを私の皿に盛り

つけやがった。しかも、その上にご丁寧にケチャップで「なみこ」って。

片付けも2人でやって、家も同時に出る。支度に時間かけてたら、後ろから妹が野次

ぶっこきやがった。化粧は気持ち薄く。

「お姉ちゃん、今度一緒に洋服買いに行つてよ」

「いいよ、そんぐらいいくらでも」

「やった。ありがとう」

「どんな服がいいの」

「お姉ちゃんみたいなの以外」

「お前なあ」

妹は笑ったまま、自転車の速度を上げていく。私も速くさせて、後ろを着いていく。

真正面から強めに浴びる風が気持ちいい。妹の背中に昨日までにはなかった感情が湧いていく。そう、心の底から信じられれば人間生きていける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3771k/>

限界はじまりました

2011年2月20日14時17分発行